『春と修羅』補遺

宮沢賢治

目次

自由画検定委員

手簡

雨がぽしゃぽしゃ降つてゐます。
心象の明滅をきれぎれに降る透明な雨です。
ぬれるのはすぎなやすいば、
ひのきの髪は延び過ぎました。

私の胸腔は暗くて熱く
もう醱酵をはじめたんぢやないかと思ひます。

雨にぬれた緑のどてのこっちを
ゴム引きの青泥いろのマントが
ゆっくりゆっくり行くといふのは
実にこれはつらいことなのです。

あなたは今どこに居られますか。
早くも私の右のこの黄ばんだ陰の空間に
まっすぐに立ってゐられますか。
雨も一層すきとほって強くなりましたし。

誰か子供が嚙んでゐるのではありませんか。
向ふではあの男が咽喉をぶつぶつ鳴らします。

いま私は廊下へ出ようと思ひます。
どうか十ぺんだけ一緒に往来して下さい。
その白びかりの巨きなすあしで
あすこのつめたい板を
私と一緒にふんで下さい。

（一九二三、五、一二、）

〔堅い瓔珞はまっすぐに下に垂れます〕

〔冒頭原稿なし〕

堅い瓔珞はまっすぐに下に垂れます。
実にひらめきかゞやいてその生物は堕ちて来ます。

まことにこれらの天人たちの
水素よりもっと透明な
悲しみの叫びをいつかどこかで

あなたは聞きはしませんでしたか。
まつすぐに天を刺す氷の鎗の
その叫びをあなたはきつと聞いたでせう。

けれども堕ちるひとのことや
又溺れながらその苦い鹹水を
一心に呑みほさうとするひとたちの
はなしを聞いても今のあなたには
たゞある愚かな人たちのあはれなはなし
或は少しめづらしいことにだけ聞くでせう。

けれどもたゞさう考へたのと
ほんたうにその水を噛むときとは
まるっきりまるっきりちがひます。
それは全く熱いくらゐまで冷たく
味のないくらゐまで苦く
青黒さがすきとほるまでかなしいのです。

そこに堕ちた人たちはみな叫びます
わたくしがこの湖に堕ちたのだらうか
堕ちたといふことがあるのかと。
全くさうです、　誰がはじめから信じませう。

それでもたうとう信ずるのです。
そして一そうかなしくなるのです。

こんなことを今あなたに云ったのは
あなたが堕ちないためにでなく
堕ちるために又泳ぎ切るためにです。
誰でもみんな見るのですし　また
いちばん強い人たちは願ひによって堕ち
次いで人人と一緒に飛騰しますから。

（一九二二、五、二一、）

厨川停車場

（もうすっかり夕方ですね。）
けむりはビール瓶のかけらなのに、
それらは苹果酒(サイダー)でいっぱいだ。
（ぢや、さよなら。）
砂利は北上山地製、
（あ、僕、車の中へマント忘れた。）
すっかりはなしこんでゐて。）

（あれは有名な社会主義者だよ。
何回か東京で引っぱられた。）
髪はきれいに分け、
まだはたち前なのに、
三十にも見えるあの老けやうとネクタイの鼠縞。

（えゝと、済みませんがね、
ぼろぼろの繻子のマント、
あの汽車へ忘れたんですが。）
（何ばん目の車です。）……………

（二等の前の車だけぁな。）

Larix, Larix, Larix,
青い短い針を噴き、
夕陽はいまは空いっぱいのビール、
くわくこうは　あっちでもこっちでも、
ぼろぼろになり　紐になって啼いてゐる。

（一九二三、六、二、）

青森挽歌　三

仮睡硅酸の溶け残ったもやの中に
つめたい窓の硝子から
あけがた近くの苹果の匂が
透明な紐になって流れて来る。
それはおもてが軟玉と銀のモナド
半月の噴いた瓦斯でいっぱいだから
巻積雲のはらわたまで

月のあかりは浸みわたり
それはあやしい蛍光板になつて
いよいよあやしい匂か光かを発散し
なめらかに硬い硝子さへ越えて来る。
青森だからといふのではなく
大てい月がこんなやうな暁ちかく
巻積雲にはひるとき
或いは青ぞらで溶け残るとき
必ず起る現象です。
私が夜の車室に立ちあがれば
みんなは大ていねむつてゐる。

その右側の中ごろの席
青ざめたあけ方の孔雀のはね
やはらかな草いろの夢をくわらすのは
とし子、おまへのやうに見える。
「まるっきり消たものもあるもんだ、
法隆寺の停車場で
すれちがふ汽車の中に
まるっきり同じわらすさ。」
父がいつかの朝さう云ってゐた。
そして私だってさうだ
あいつが死んだ次の十二月に

酵母のやうなこまかな雪
はげしいはげしい吹雪の中を
私は学校から坂を走って降りて来た。
まっ白になった柳沢洋服店のガラスの前
その藍いろの夕方の雪のけむりの中で
黒いマントの女の人に遭った。
帽巾に目はかくれ
白い顎ときれいな歯
私の方にちょっとわらったやうにさへ見えた。
(それはもちろん風と雪との屈折率の関係だ。)
私は危なく叫んだのだ。

(何だ、うな、死んだなんて
いゝ位のごと云って
今ごろ此処ら歩てるな。)
又たしかに私はさう叫んだにちがひない。
たゞあんな烈しい吹雪の中だから
その声は風にとられ
私は風の中に分散してかけた。
「太洋を見はらす巨きな家の中で
仰向けになって寝てゐたら
もしもしもしもしって云って
しきりに巡査が起してゐるんだ。」

その皺くちゃな寛い白服
ゆふべ一晩そんなあなたの電燈の下で
こしかけてやって来た高等学校の先生
青森へ着いたら
苹果をたべると云ふんですか。
海が藍靛に光ってゐる
いまごろまっ赤な苹果はありません。
爽やかな苹果青のその苹果なら
それはもうきっとできてるでせう。

（一九二三、八、一）

津軽海峡

夏の稀薄から却って玉髄の雲が凍える
亜鉛張りの浪は白光の水平線から続き
新らしく潮で洗ったチークの甲板の上を
みんなはぞろぞろ行ったり来たりする。
中学校の四年生のあのときの旅ならば
けむりは砒素鏡の影を波につくり
うしろへまっすぐに流れて行った。

今日はかもめが一疋も見えない。
（天候のためでなければ食物のため、
　じっさいベーリング海峡の氷は
　今年はまだみんな融け切らず
　寒流はぢきその辺まで来てゐるのだ。）
向ふの山が鼠いろに大へん沈んで暗いのに
水はあんまりまっ白に湛へ
小さな黒い漁船さへ動いてゐる。
（あんまり視野が明る過ぎる
　その中の一つのブラウン氏運動だ。）
いままではおまへたち尖ったパナマ帽や

硬い麦稈のぞろぞろデックを歩く仲間と
苹果を食ったり遺伝のはなしをしたりしたが
いつまでもそんなお付き合ひはしてゐられない。
さあいま帆綱はぴんと張り
波は深い伯林青に変り
岬の白い燈台には
うすれ日や微かな虹といっしょに
ほかの方処系統からの信号も下りてゐる。
どこで鳴る呼子の声だ、
私はいま心象の気圏の底、
津軽海峡を渡って行く。

船はかすかに左右にゆれ
鉛筆の影はすみやかに動き
日光は音なく注いでゐる。
それらの三羽のうみがらす
そのなき声は波にまぎれ
そのはゞたきはひかりに消され
（燈台はもう空の網でめちゃめちゃだ。）
向ふに黒く尖った尾と
滑らかに新らしいせなかの
波から弧をつくってあらはれるのは
水の中でものを考へるさかなだ

そんな錫いろの陰影の中
向ふの二等甲板に
浅黄服を着た船員は
たしかに少しわらってゐる
私の問を待ってゐるのだ。

いるかは黒くてぬるぬるしてゐる。
かもめがかなしく鳴きながらついて来る。
いるかは水からはねあがる
そのふざけた黒の円錐形
ひれは静止した手のやうに見える。

弧をつくって又潮水に落ちる
（きれいな上等の潮水だ。）
水にはひれば水をすべる
信号だの何だのみんなうそだ。
こんなたのしさうな船の旅もしたことなく
たゞ岩手県の花巻と
小石川の責善寮と
二つだけしか知らないで
どこかちがった処へ行ったおまへが
どんなに私にかなしいか。
「あれは鯨と同じです。けだものです。」

くるみ色に塗られた排気筒の
下に座って日に当ってゐると
私は印度の移民です。
船酔ひに青ざめた中学生は
も少し大きな学校に居る兄や
いとこに連れられてふらふら通り
私が眼をとぢるときは
にせもののピンクの通信が新らしく空から来る。
二等甲板の船艙の
つるつる光る白い壁に

黒いかつぎのカトリックの尼さんが
緑の円い瞳をそらに投げて
竹の編棒をつかってゐる。
それから水兵服の船員が
ブラスのてすりを拭いて来る。

（一九二三、八、一、）

駒ヶ岳

弱々しく白いそらにのびあがり
その無遠慮な火山礫の盛りあがり
黒く削られたのは溶けたものの古いもの
（喬木帯灌木帯、苔蘇帯といふやうなことは
　まるっきり偶然のことなんだ。三千六百五十尺）
いまその赭い岩巓に
一抹の傘雲がかかる。

（In the good summer time, In the good
summer time;)

《ごらんなさい。
　その赭いやつの裾野は
うつくしい木立になって傾斜（スロープ）もやさしく
黄いろな林道も通ってゐます。》

「全体その海の色はどうしたんでせう。
青くもないしあんまり変な色なやうです。」
「えゝ、それは雲の関係です。」
何が雲の関係だ。気圧がこんなに高いのに。

旭川

植民地風のこんな小馬車に
朝はやくひとり乗ることのたのしさ
「農事試験場まで行って下さい。」
「六条の十三丁目だ。」
馬の鈴は鳴り馭者は口を鳴らす。
黒布はゆれるしまるで十月の風だ。
一列馬をひく騎馬従卒のむれ、

この偶然の馬はハックニー
たてがみは火のやうにゆれる。
馬車の震動のこころよさ
この黒布はすべり過ぎた。
もっと引かないといけない
こんな小さな敏捷な馬を
朝早くから私は町をかけさす
それは必ず無上菩提にいたる
六条にいま曲れば
おゝ落葉松　落葉松　それから青く顫へるポプルス
この辺に来て大へん立派にやってゐる

殖民地風の官舎の一ならびや旭川中学校
馬車の屋根は黄と赤の縞で
もうほんたうにジプシイらしく
こんな小馬車を
誰がほしくないと云はうか。
乗馬の人が二人来る
そらが冷たく白いのに
この人は白い歯をむいて笑ってゐる。
バビロン柳、おほばことつめくさ。
みんなつめたい朝の露にみちてゐる。

宗谷挽歌

こんな誰も居ない夜の甲板で
（雨さへ少し降つてゐるし、）
海峡を越えて行かうとしたら、（漆黒の闇のうつくしさ。）
私が波に落ち或いは空に擲げられることがないだらうか。
それはないやうな因果連鎖になつてゐる。

けれどももしとし子が夜過ぎて
どこからか私を呼んだなら
私はもちろん落ちて行く。
とし子が私を呼ぶといふことはない
呼ぶ必要のないとこに居る。
もしそれがさうでなかったら
(あんなひかる立派なひだのある
　紫いろのうすものを着て
　まっすぐにのぼって行ったのに。)
もしそれがさうでなかったら
どうして私が一緒に行ってやらないだらう。

船員たちの黒い影は
水と小さな船燈との
微光の中を往来して
現に誰かは上甲板にのぼつて行つた。
船は間もなく出るだらう。
稚内の電燈は一列とまり
その灯の影は水にうつらない。
　潮風と霧にしめつた舷に
その影は年老つたしつかりした船員だ。
私をあやしんで立つてゐる。
霧がばしやばしや降つて来る。

帆綱の小さな電燈がいま移転し
怪しくも点ぜられたその首燈、
実にいちめん霧がぼしゃぼしゃ降ってゐる。
降ってゐるよりは湧いて昇ってゐる。
あかしがつくる青い光の棒を
超絶顕微鏡の下の微粒子のやうに
どんどんどんどんどん流れてゐる。
（根室の海温と金華山沖の海温
　大正二年の曲線と大へんよく似てゐます。）
帆綱の影はぬれたデックに落ち
津軽海峡のときと同じどらがいま鳴り出す。

下の船室の前の廊下を通り
上手に銅鑼は擦られてゐる。
鉛筆がずゐぶんす早く
小刀をあてない前に削げた。
頑丈さうな赤髯の男がやって来て
私の横に立ちその影のために
私の鉛筆の心はうまく折れた。
こんな鉛筆はやめてしまへ
海へ投げることだけは遠慮して
黄いろのポケットにしまってしまへ。
霧がいっそうしげくなり

私の首すぢはぬれる。
浅黄服の若い船員がたのしさうに走つて来る。
「雨が降つて来たな。」
「イヽス。」
「イヽスて何だ。」
「雨ふりだ、雨が降つて来たよ。」
「瓦斯だよ、霧だよ、これは。」
とし子、ほんたうに私の考へてゐる通り
おまへがいま自分のことを苦にしないで行けるやうな
そんなしあはせがなくて
従つて私たちの行かうとするみちが

ほんたうのものでないならば
あらんかぎり大きな勇気を出し
私の見えないちがった空間で
おまへを包むさまざまな障害を
衝きやぶって来て私に知らせてくれ。
われわれが信じわれわれの行かうとするみちが
もしまちがひであったなら
究竟の幸福にいたらないなら
いままっすぐにやって来て
私にそれを知らせて呉れ。
みんなのほんたうの幸福を求めてなら

私たちはこのまゝこのまっくらな
海に封ぜられても悔いてはいけない。
（おまへがこゝへ来ないのは
　タンタジールの扉のためか、
　それは私とおまへを嘲笑するだらう。）

呼子が船底の方で鳴り
上甲板でそれに応へる。
それは汽船の礼儀だらうか。
或いは連絡船だといふことから
汽車の作法をとるのだらうか。
霧はいまいよいよしげく

舷燈の青い光の中を
どんなにきれいに降ることか。
稚内のまちの灯は移動をはじめ
たしかに船は進み出す。
この空は広重のぼかしのうす墨のそら
波はゆらぎ汽笛は深くも深くも吼える。
この男は船長ではないのだらうか。
（私を自殺者と思つてゐるのか。
私が自殺者でないことは
次の点からすぐわかる。
第一自殺をするものが

霧の降るのをいやがつて
青い巾などを被つてゐるか。
第二に自殺をするものが
二本も注意深く鉛筆を削り
そんなあやしんで近寄るものを
霧の中でしらしら笑つてゐるか。）

ホイッスラアの夜の空の中に
正しく張り渡されるこの麻の綱は
美しくもまた高尚です。
あちこち電燈はだんだん消され
船員たちはこゝろもちよく帰つて来る。

稚内のまちの北のはづれ
私のまっ正面で海から一つの光が湧き
またすぐ消える、　鳴れ汽笛鳴れ。
火はまた燃える。
「あすこに見えるのは燈台ですか。」
「さうですね。」
またさっきの男がやって来た。
私は却ってこの人に物を云って置いた方がいゝ。
「あすこに見えますのは燈台ですか。」
「いゝえ、　あれは発火信号です。」
「さうですか。」

「うしろの方には軍艦も居ますがね、
あちこち挨拶して出るとこです。」
「あんなに始終つけて置かないのは、

〔この間、原稿数枚なし〕

永久におまへたちは地を這ふがいい。
さあ、海と陰湿の夜のそらとの鬼神たち
私は試みを受けよう。

（一九二三、八、二）

自由画検定委員

どうだここはカムチャッカだな
家の柱ものきもみんなピンクに染めてある
渡り鳥はごみのやうにそらに舞ひあがるし
電線はごく大（だい）たんにとほってゐる
ひはいろの山をかけあるく子どもらよ
緑青の松も丘にはせる

こいつはもうほんもののグランド電柱で
碍子もごろごろ鳴ってるし
赤いぼやけた駒鳥もとまってゐる
月には地球照(アースシャイン)があり
くゎくこうが飛び過ぎると
家のえんとつは黒いけむりをあげる

おいおいおいおいおい
とてもすてきなトンネルだぜ
けむって平和な群青の山から
いきなりガアッと線路がでてきて

まるで眼のまへまで一ぺんにひろがってくる
鳥もたくさん飛んでゐるし
野はらにはたんぽぽやれんげさうや
じゅうたんをしいたやうです

お月さまからアニリン色素がながれて
そらはへんにあかくなってゐる
黒い三つの岩頸は
もう日も暮れたのでさびしくめいめいの銹をはく
田圃の中には小松がいっぱいに生えて
黄いろな丁字の大街道を

黒いひとは髪をぱちゃぱちゃして大手をふってあるく

鳥ががあがあとんでゐるとき
またまっしろに雪がふってゐるとき
みんなはおもての氷の上にでて
遊戯をするのはだいすきです
鳥ががあがあとんでゐるとき
またまっしろに雪がふってゐるとき

青ざめたそらの夕がたは
みんなはいちれつ青ざめたうさぎうまにのり

きらきら金のばらのひかるのはらを
犬といっしょによこぎって行く
青ざめたそらの夕がたは
みんなはいちれつ青ざめたうさぎうまにのり

底本：「宮沢賢治全集1」ちくま文庫、筑摩書房
1986（昭和61）年2月26日第1刷発行
1998（平成10）年5月12日第17刷発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：柴田卓治
校正：かとうかおり
2000年10月4日公開
2004年3月26日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。